

特集

死者を弔うこと — 葬送の行方

葬式は今、羅針盤を失った状態にあるのではないか。
葬式が生活のなかにあり、地域が相互扶助で生き、
共同体を形成していた時代は遠く過ぎ去った。
個の時代をいやおうなしに迎えた今、
人の死に伴って営まれる葬式は変化をよぎなくされている。
超高齢社会を迎え、3・11を体験し、今後の行方を考える。
(碑文谷創)

◎序 葬式の原点はどこにあるのか — 『葬式は、要らない』と3・11……18

◎3・11が問うていること……20

◎〈考察〉 弔いとしての葬式……24

1. 葬式の原点は何か……24
2. 「死者(遺体)の尊厳を守る」こと……24
3. 近親者の悲嘆への配慮……26
4. 死者を弔う……26
5. 葬式をする遺族の心理の違い……28
6. 死の概念……29
7. 死生観事始め……30



序 葬式の原点はどこにあるのか — 『葬式は、要らない』と3・11

3・11がもたらしたもの

2011年3月11日、私たちを震撼させたのが東日本大震災であった。

巨大地震、大津波という自然の猛威の前に人間はまったく無力であった。いとも簡単に多くの人命が奪われた。その痛切さを3・11によっていやというほど知らされた。

喪われた個々のいのちがいかに大切で、そのいのちは再び帰ることがないこと、その人たちと共にあった暮らしが、「復興」によってもけつして復し戻ることがないこと、そこに起こった弔いがいかに切実なものであるかをいやがおうでも知らされたのだ。

火葬自体がささやかな、そして切実な想いで行われた。

葬式とは祭壇を飾るとかの装飾を意味するのではない。第一義的には死者を弔うことにあるのだ。

そこにいる死者、その家族や友人

たちの悲しみ、傷みを抜きにした葬式はないし、それを考慮に入れない葬式論議は不毛なのだ。

葬式の要・不要論議が吹き飛んだのは、死の悲痛な現実の前に耐え得る議論ではなかったからだ。葬式の実態を踏まえた議論ではなかったからだ。葬式について、もてあそぶがごとき議論は、人の死についてのリアルな認識を欠いてのみ可能であるのだ。

固有の人の死に即さない葬式であるならば、不要論者が言うとおりやめても事態は変わらない。

本来は固有の人の死に即さない葬式などあるほうがおかしい。もし、仮にあるとするならば、それはもう「葬式」ではない。

『葬式は、要らない』のベストセラー化が意味するもの

大震災の後には、世の中ではそれまで「葬式不要論」が唱えられ、そ

れを巡って空疎な議論が展開されたなどということはすっかり忘れ去られた（その議論には私も参加したのだが）。

東日本大震災の約1年前、10年1月、島田裕巳『葬式は、要らない』（以下、島田本）が幻冬舎から出版され、たちまちベストセラーになった。島田によるならば、書名は最初「葬式は、贅沢だ」を予定していたという。

この本がベストセラーとなったことは、いまだ多数派の仏教葬式、死者への弔いよりも社会的儀礼を行うことに腐心して行われているかのように思える葬式への不満が根強くあることを示した。

島田本の内容が問題で



大津波の後の陸前高田市



あるのはもちろんだが、安直に書かれたその本が社会からかくも受け入れられたことがもつ意味のほうが大さい。島田本に共鳴する人が多くいた、という事実である。

島田本はタイトルがセンセーショナルゆえに注目を浴びたが、その内容は目新しいものではない。ほぼ同じような主張をした本が、約40年前の高度経済成長期のまっただ中に、1968年に出版されている。

島田本は、葬式の基本をなす「死者を弔う」ことに焦点をあてたものではない。

葬式というプロセスから強引に「点」としての通夜や葬式という儀式の部分のみを切り出したものである。この罪が最も重い。

島田が出した、日本の葬式費用がべらぼうに高いことを立証するデータ。実はこれは根拠のない、誰が、どのような調査をして得られたかがまったく不明な、学者であれば使用してはならないデータであった。しかし島田が引用することによって、たちまち権威ある信頼できるデータとして受け取られ、それにマスコミにもさらには素人同然であるにもかかわらず時流に乗って発言した「学者たちまでもが追隨して「島田」によると」と引用し、まったく根拠のないデータがあたかも根拠のあるデータのごとくに取り扱われるようになった。「知の退廃」としか言いようがない。

島田の本の内容には高度

経済成長期に社会儀礼色を強める葬式に抗して太田典礼らが著した『葬式無用論』の主張の域を出ていない。

太田典礼や稲田務らには、高度経済成長期に社会儀礼色を強めつつある状況に抗



する近代主義者としての少数派の気がまだあった。

しかし島田にはそうした気概はない。ひたすら本が売れることだけを目的としている。

すでに20年前の1991年にバブル景気が音を立てて崩壊した。それが「失われた10(20)年」を現象し、社会の価値観が大きく変化した。葬送の世界も同様である。

バブル崩壊がさまざまな面で影響を与え始め、これが一時的変化ではなく日本社会の大きな基盤変化であると感じるには時間を要した。一人ひとりの消費者心理を変えるには約5年を必要とした。

葬送においても1995年頃より個人化現象が進んできた。それが2

000年以降に主流となった。島田は、そうした高度経済成長期以降の葬式への違和感が公然と唱えられ、また主張する者がもはや少数派でないことを見てとり、いわば「時流」に乗って、「時流」を利用して本を出し、ベストセラー化することに成功した、と言えよう。

島田が問題としたのは「イベント」としての葬式である。これにより葬式はふやけた存在であることを強烈に印象づけた。

ふやけた、切実感のないイベントに対して必要だ、不要だと言いつても議論自体は進まない。しかし、これは島田のみならず多くの宗教者、葬祭業者、葬式ライターたちに共通する誤謬であった。

葬式、葬送というのは、人の死に直面した遺族らによる弔い、葬りという全体的な儀礼構造をもっており、通夜、葬儀という点の儀式はあくまで構造全体に内包されるものである点が十分に理解されていない。あたかも構造全体から切り離すことができるとするのは浅薄な理解である。

繰り返すが、葬式というのは実用書が教えて済むイベントではない。葬式は、死に直面し、死者を弔い、葬るプロセスである。この点を忘れた議論は意味をもたない。

3・11が問うてくること

災害はいつ発生しても
おかしくない

2011年3・11の衝撃が今なお
社会の空気を支配している。

急遽、南海地震等への対策があち
こちで講じられるようになった。

東日本大震災は千年に1回、と言
われるが、地球規模で考えるならば
それはわずかな差にすぎない。

さまざまな地で地層を掘り返して
調査が行われている。その結果わか
ったことは、文献には残っていない
が幾度もの大地震あるいは津波が発
生した痕跡がある、ということであ
る。地震国日本にあつて将来にわた
って生きていくためにはどうするか、
という課題が目の前にある。

「災害支援」―これは葬祭業者とし
ては欠くことのできない社会的責任
としてある。

フクシマの悲劇

3・11東日本大震災が実際に発生
し、その被害は私たちの想定をはる
かに超えた。残念なことに、しばら

く大災害が起こらないと、人間は自
然の猛威を甘く見がちである。

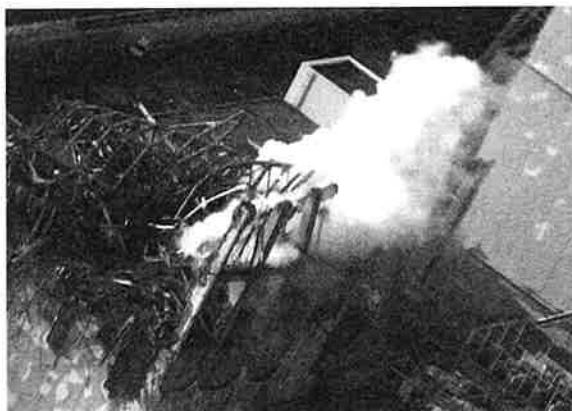
当然取られるべきであった対策も
わずか数年の「費用対効果」という
理屈の前で葬られてきた。その結果
の東電福島第一原子力発電所事故で
あつた。

社内で対策の必要性が唱えられて
いたのに、経営陣は「今さらそい
う対策を講じると、原発を安全と言
っていた言葉に不信が生ずるかもし
れない」と、「安全」をではなく「安
全神話」を守ろうとした。その結果
があの事故である。

危険区域には長い間津波犠牲者の
遺体が放置された。それを放置して
退去せざるを得なかつた福島県警が、
防護服に身を固め、先頭切つて遺体
収容作業を行った。

多くの葬祭業者が放射能汚染遺体
には係わることに躊躇したが、中小
零細の葬祭業者が、福島県を要請を
受けて、除染処置後、遺体を処置し
火葬場に搬送するという作業を黙々
と行った。

どんな状態の遺体であれ、公衆衛



生的処置を行い、死者（遺体）の尊
厳を守るため最大限尽くす、という
県警、福島県葬祭業協同組合の一体
となった対応が行われた。

原発事故はいまや「フクシマ」と
いう言葉とともに、「ヒロシマ」「ナ
ガサキ」と並んで記憶されるように
なった。

多くの人が町から強制退去になり、
町は空洞化した。もし復興があると
すれば、20〜40年の時間を必要とす
るだろう。

遺体搜索・収容・安置

岩手県や宮城県、福島県（青森県、
茨城県、千葉県も忘れてはならない
被災地である）の大地震に続く10メ
ートルを超す大津波。これも想定を
はるかに超えた。大津波は速いスピ
ードで田畑、家屋を薙ぎ倒して人々
に襲いかかり、大勢のいのちを呑み
込んだ。

現地の葬儀社、JA葬祭、互助会
の従事者が自らの家族を喪つた悲嘆
を抱えながら、遺体安置、納棺、搬
送…と、限られた資材だけで遺体の
尊厳を守ろうと努め、遺族に寄り添
った。また全国からおそらく150
0名くらいの葬祭従事者が現地に足
を運び支援した。

各地で葬祭業者は自治体、県警と
連携を取りながら作業した。

思いがけずきれいな遺体もあつた。
冷たい土中に埋まつた状態の遺体は、
数日後に発見されてもきれいだった
のがあつた。遺体安置所では遺族だ
けではなく、近隣の人が顔を出して
1体1体確認し「あ、これ〇〇さん

死者を弔うこと — 葬送の行方



女川町を襲った大津波

震災で直接死亡したのではないが「東日本大震

災で直接死亡したのではないが「東日本大震

災で直接死亡したのではないが「東日本大震

のおばあちゃんだ」と身元確認に大きな力となった。地域のコミュニティが生きた。

10日、2週間と経過すると発見時の様相も変わり、腐敗が進行したり、破損した遺体も増加した。

1つの遺体を複数の家族が「うちの一人」と言って譲らなかったこともあった。

また県警が「おたくの人ではありませんか」と訊いても、その変容ぶりに「違う」と言い張った家族もいた。

複数の家族が取り合った遺体も、

がんとして違うと言いつ張った遺体も、最後はDNA鑑定で身元が確認された。

なかなか身元が判明しない遺体、後から発見された遺体は身元不明なままで仮埋葬、火葬された。後にDNA鑑定で身元が判明し、家族には骨壺に入れられた遺骨が渡された。

遺骨を渡され「これがおたくのご主人の遺骨です」と言われ、家族は思うたであろう。

また、家族全員が犠牲になった場合はDNA鑑定すらできない。

おそらくは海に流された遺体が多かったのだろう。今なお2846人が行方不明である(12年8月8日現在)。

なお死亡者は1万5868人。

行方不明者のほとんどが家族申述方式での死亡届を提出している。通常は医師または警察が死亡の事実を証明して死亡届が出されるのだが、今回は家族にその証明をさせるという、家族には精神的負担を強いるものであった。

災による負傷の悪化等により亡くなられた方で、災害弔慰金の支給等による法律に基づき、当該災害弔慰金の対象になった方である「災害関連死」と認定された人は1632人に及んだ(12年3月31日復興庁調べ)。

行方不明者をどう計算したらいいか迷うが、死者(遺体で発見され死亡と判定された人)、震災関連死に行方不明者(家族から県警、市町に届け出のあった人)の合計は2万346人に及んだ。

リアルな遺体

今回の大震災では遺体がリアルなものとして現出した。

直後にあちこちに横たわる遺体、その遺体の収容、安置所への安置、遺体の検案、火葬までの遺体の待機・安置、火葬場への遺体の搬送、そして火葬。

元来「仮埋葬」を2年としたのは、2年以内の掘り起こしを想定したものではない。2年間は掘り起こしをしないことを意味した。およそ2年経過することで白骨化することを想定し、白骨化した遺体を掘り起こし、火葬して遺骨にして家族に還すことを想定していた。

だが仮埋葬して間もなく改葬することになると、遺体の腐敗は進行し、解体の真っ最中である。

火葬を想定して作られた棺は重みには耐えかねる材質。棺は崩れ、内部は血液と体液で溢れ、遺体は関節で分解された過酷な状況。おそらくここまで腐敗過程にある遺体に葬儀社も接しなかったであろう。

だが行政から依頼を受けた葬儀社の社員たちは、「大切な家族を火葬して丁寧に葬ってやりたい」という



遺体安置所 (南三陸町)

遺族の願いを受けて黙々とその作業をした。彼らが最初から最後まで念じていたことは「遺体の尊厳を守る」ということだった。その使命感で過酷な状態にある遺体を新しい棺に入れ替えて、遺族の待つ火葬場に送り出した。

宮城県(株)清月記(株)が石巻市で、舟屋葬祭が気仙沼市で遺体の掘り起こし作業を請け負った。そこだけではなく、請け負った建設会社の下で多くの葬儀社の従業員たちがこうした作業をやり抜いた。

遺族らが死者を弔い、葬るには、その前提として遺体に直面し、葬りを可能とする状態に準備するという葬儀社の人間にしかできない作業があった。



遺体安置所での棺の組み立て作業



仮埋葬された柩の掘り起こし作業

東日本大震災は、弔いと死者（遺体）の尊厳を守ることは不可分離であることを改めて教えてくれた。

避難者まだ約33万人

東日本大震災の直後の11年3月14日時点で避難者は約47万人に及んだ。震災直後から電気も暖房もないなかで凍える生活を強いられた。

あれから1年6カ月、避難所生活者は205人であるが、仮設住宅等での避難生活を送っている人を加えると32万9777人が依然避難生活を送っている。

仮設住宅が約4万9千戸、公営住宅等が約1万9千戸、民間住宅が約6万3千戸。

県外への避難も多い。最も県外避

iPad
Windows

葬祭業「最強」エリア戦略ソフトの全貌って？ ～ 漫画編 ～

売上だけでなく、仕入原価・粗利・在庫も自動計算をしてくれるんです！

最新の脱字が少なくなったけど、何か理由があるのかい？

クラウド上の情報を自動読み取るからミスも減っちゃいましたよ！

クラウド

自動化

全体的システムが動くから入力する手間が半減するんですよ！

合理化利益が大きいなあ！！

エリア戦略ソフトってなんだった？

そうなんですよ！！接続台数無制限、同時処理OKからでもなんですよ！！

売上だけでなく、仕入原価・粗利・在庫も自動計算をしてくれるんです！

これさえあれば、少人数で素晴らしい管理力と営業力を発揮出来るんです！！

パーフェクトなソフト、まさにスーパーマンだね！！

それらの情報を葬家の打ち合わせ場所で見られるのかい？

会社で処理した請求書情報は自動的にクラウド上でどこでもiPadで見られるんです。

会員管理で、世帯主の過去売上・会員種別や他社情報も簡単に見られるのか？

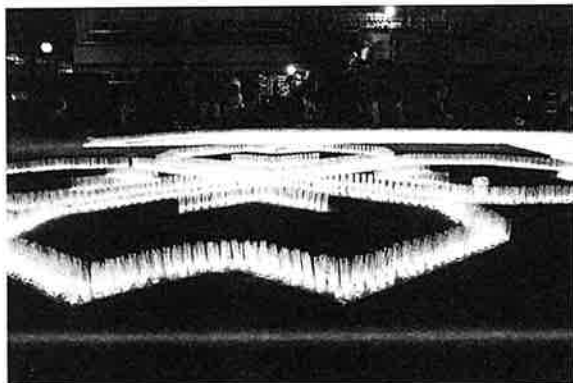
そうですね！！データベースになっていますから！！

それに、ゼンリンで全戸データベースで一軒一軒の家を塗り、世帯主情報があると書き込めるんです。

我が社のターゲットエリアがはっきりわかるね！！

—エリア戦略システムならケントピア—
資料のご請求・お問い合わせはお気軽に右記までご連絡下さい。

ケントピア株式会社 TEL03-3822-4721代 FAX03-3822-9641
Mail: info@kentopia.co.jp http://www.kentopia.co.jp/



犠牲者を追悼する灯 (気仙沼市)

難が多いのは原発事故の不安がまだ残る福島県。約6万人が県外避難。岩手県から約1千6百人、宮城県からは約8千3百人が県外に避難している。(復興庁12年9月6日調べ)

福島県の人が「町が消え若者と子どもが消えた」と嘆いたが、原発事故が招いたのは風評被害も含め長期の奥深い被害であり、これは現在進行形である。

岩手県、宮城県の復興も長期化しそうである。港、魚の加工場、漁業従事者でも50歳以上の人は長期化を要する再出発に不安を隠せない。

「復興」が大きな声で唱えられているが、被災地の人の心には依然として死者を想う心が強くあることを心

に深く留める必要があるだろう。そしてそれは極めて当然なことである。それは単に防災に対する備え、意識を変えることを意味しない。それぞれの個々の固有な死者たちへの想いを大切にするのである。

苦しい悪夢のような大震災であった。だが復興は、犠牲となりいまだ多くの行方不明者がいることを早くに忘却して新しい未来への夢を語ることでない。いくら行政がそうした未来を描こうと、人々の心には死者を想う気持ちがある。これを否定するのではなく、心の傷を傷として大切にして、人々の弔う想いに添った町づくりが必要なのだろう。

われわれが3・11から学ぶ教訓は、防災あるいは減災のことだけではなはずである。

宗教者の想い、被災者の想い

多くの宗教者が今なお現地で活動を展開している。それは被災者に寄り添うことだろうし、今なお被災者の内にはぽっかり口を開けたままの空洞が埋められなく存在していることを見つめた活動なのだろう。

だがこれが一時期の活動ではなく、日常的な町の中の寺、神社、教会とすることが必要なのではないか。今回の宗教者らの活動で唱えられ

たのが「傾聴」である。これは従来の信徒や市民に語り、説教するだけで、信徒や市民の心に耳を傾けることが少なかった己への反省としては有効だろう。問題とすべきは今さらのように「傾聴」が大切であると反省しなければいけない己らである。

それを外に向かつて、信徒や市民に向かつて「傾聴しますよ」と言うのは、個人の感じることなのだろうか、何か違和感がある。

多くの良心的な人たちが「心のケア」を行おうと現地に入り活動した。その人たちがいい人で自分たちは現地入りしなくてはならない、という切迫した想いであったことは理解する。だがその多くは現地の人の無言の拒否に合い、押しつけがましい行為と誤解され、悩んだ。

「傾聴」もおおざろとした態度ではあるが、そして一部で確かに被災者の求めに応じた活動をしたとはいえる。だが、その活動も健常者が障害者に接するとき「他人」の係わりであると見られた。

多くの宗教者が活動の意味あること、必要とされていることを力説し、評価する。そうなのだろう。しかし、それが一部の避難所から「心のケアお断り」という反発を招いたことは真剣に考えられている。

「宗教者の出番」と張り切るのではなく、もっと自然体で日常の中で信徒や市民に開かれた寺・神社・教会であり続けることが求められているのではないか。

遺族らが喪われたのちを思いつける時、一緒に祈る宗教者が必要とされるのだろう。一緒に祈る時、想いを共有するきっかけのようなものができるかもしれない。

これはあらゆる葬式でも言えることである。死者を弔おうとして営む葬式で、遺族の想いに寄り添おうとすることのできない宗教者は、被災地でも求められないはずである。

宗教者、葬儀に従事する者は、自分の中に死者を抱えていなければならない。その死者とは家族とは限定されない。死者一般でもない。顔が見える具体的な固有の死者である。

3・11が投げかけ、今なお問うている課題は、死の現実がいかに過酷で切実なものであるかということである。死者を弔うということは儀式の作法云々ではない。理屈でもない。切実な想いの発露だと理解すべきではないか。単純だが、暮らしを喪失した時、私たちは何かをもつて簡単に埋められるものではないということである。